

ソロモン諸島で咲かせたソフトボールの「花」 普及の最前線

文・写真 井上 栄 (青年海外協力協会)

第1回

発展途上国とソフトボール



いのうえ さかえ / 1980年12月11日生まれ。愛知県出身。小学校からソフトボールを始めて大学までプレー。卒業後は愛知県公立中学校に体育教諭として勤務。2007年に退職し、青年海外協力隊に参加してジンバブエ共和国(07年6月~08年3月)、ソロモン諸島(08年8月~09年12月及び10年4月~11年3月)に赴任。帰国後は、星橋名古屋中での勤務を経て、公社・青年海外協力協会に所属して駒ヶ根青年海外協力隊訓練所に勤務。

ソロモン諸島という国をご存知でしょうか。海、ジャングル、笑顔、満天の星空が広がる、ソロモン諸島(以下ソロモン)の情景が今も鮮明に脳裏に浮かびます。南太平洋に浮かぶ大小の島々からなる国、それがソロモンです。

私は青年海外協力隊員の一人として、ソロモンでソフトボールの普及活動をしていました。選手として輝かしい経歴があるわけでも、英語が得意なわけでもない私が海外、それも発展途上国と呼ばれる国でその普及活動をするとは、夢にも思っていませんでした。

小学生のとき、姉妹でバッテリーを組む近所のお姉さんにあこがれてソフトボールを始めました。小学校でその楽しさに魅了され、ソフトボール部のなかった中学校に部を新設してもらい、最初はユニフォームもないので創部から一年半は体操服に背番号を縫い付けて大会に出ていました(笑)。さらに高校、大学では、部員不足に悩まされま

した。高校2年の冬は部員4人、大学1年の冬は3人。必死に人集めをしながらのソフトボール・ライフでも、辞めようと思ったことはありませんでした。大学卒業後は教職に就き、中学校で部活の副顧問としてソフトボールに関わりました。生徒たちの笑顔、努力、成長を目の当たりにし、充実感を抱いていました。自分は生徒たちに何を伝えられるのだろうか」という疑問と不安が頭をもたげるようにも……。生徒たちにいるような世界を伝えられる教員になりたいと考えたとき、青年海外協力隊の募集広告を見つけて「これしかない」と思いました。

こうした思いから応募した青年海外協力隊。無事に合格し、最初に派遣された国は、アフリカのジンバブエ共和国(以下ジンバブエ)。2007年6月から赴任したのですが、そのときジンバブエはハイパーインフレによる経済状況の悪化が著しい時期でした。そういう中でのある日、配属先の大学に隣接する中

学校で、休日にソフトボールをしているのを知りました。これが、途上国でのソフトボールとの出会いです。初めて練習に参加した日、野球をする男性たちとソフトボールをする数名の女性がいて、一人の女性が声をかけてくれました。ピッチャーだと言われ彼女と早速ピッチングをすることに。ウィンドミルから繰り出されるボールは、速くて、重くて驚きました。練習後に彼女と話していると、彼女にソフトボールを教えたのは、私と同じ日本人ボランティアであること、みんなが共有している道具も彼らが残していったものだということが分かりました。確かにクラブには日本人の名

★ ★ ★ ★ ★

ソロモン諸島 Solomon Islands

首都: ホニアラ (ガダルカナル島)

人口: 約53万人

言語: 英語、ピシン語

面積: 2万8,900km² (岩手県の約2倍)

大小約100の島々からなる英連邦の国で、4000もの集落が点在している。地理的にオーストラリアとの関係が深く、日本ともいろいろな面で友好を結んでいる。国民の大半が農業・漁業に従事しているが、近年は天然資源の開発で注目を浴びる。

★ ★ ★ ★ ★

◀ジンバブエ
小学校での体育授業風景(左)。夕方、自宅前で近所に住む子どもたちとソフトボールに興じた



▶ソロモン
町中から食べ物の葉まる中央市場。漁業はソロモンの主要産業で、漁師は手作りのカヌーで漁へ出る

前や「JICA」の文字。先述のとおり当時は経済状況が悪く、物がない、お金がない。さらに毎日の停電、断水と、国全体が機能を停止しているような状況でした。ボランティアとして私には体育の普及と教員養成が求められていたが、今、この国に必要なことはほかにあるのではないか」と思わずにはいられません。

そんな中でソフトボールに興じる人たちの出会いは、私に大きな勇気を与えてくれました。こんな状況でもソフトボールをしたい人がいる、家から何時間も歩いてグラウンドに来る人がいる。「体育が、スポーツがソフトボールが彼らの苦しい生活に一瞬の喜びを与えている」と思いました。

トボールができるかもしれない。そんな淡い期待を抱きながら、語学訓練を終え、本格的に活動が始まりました。休日には、先輩ボランティアと村を訪問し、ソロモンの人々がどんな生活をしているのか、見て回る。人と直接かかわりたいという気持ちが強くなっていく一方で、どうやって彼らのかかわりを生むか。私の中に出てきた答えは、一つ。ソロモン人とソフトボールをしよう。ここから、私のソロモンでのソフトボールの普及が始まりました。長い前置きになりましたが、今後は、実際の現地での普及活動について紹介していきます。

Information JICAボランティアとは

JICAボランティア事業は、日本政府のODA予算により、独立行政法人国際協力機構(JICA)が実施する事業です。その形態は、年齢・活動地域・目的の違いで「青年海外協力隊」「シニア海外ボランティア」「日系社会青年ボランティア」「日系社会シニア・ボランティア」の4種があります。青年は20~39歳、シニアは40~69歳とされ、今年1月末現在、約70カ国で2300人以上のボランティアが受入国の人々とともに生活し、彼らの言葉を話し、働き、試行錯誤しながら発展途上国の人々のために活動をしています。HP/ <http://www.jica.go.jp/volunteer>

